

京都市立堀川高等学校 第14回 教育研究大会 分科会要約

国語科

分科会テーマ：『国語の授業における「トライアングル」の模索～トライ・トライアングル～』

第1部 『本校国語科の取組紹介と研究授業の研究協議』

初めに本校教員が国語科の取組やあらましを紹介した。特に、本校国語科のコンセプト（「ことばが世界をつくる」など）や、3年間のカリキュラムの中で本校の独自性が現れた部分については、取り上げて説明した。

次に、研究授業者1名より研究授業のねらいと準備の過程における工夫を報告した。今回の研究授業は、生徒たちがグループに分かれて和歌の解釈を主体的に行い、それを「授業」というものであった。この形式は、今回の分科会テーマである「トライアングル（授業者—生徒間だけでなく、生徒同士の双方向性をも指す）」の実現を目指して構築されたものである。和歌を取りあげたねらいは、生徒たちの日常の言語活動と距離がある和歌世界に対する興味関心を引き起こし、和歌の解釈はどうしても「感性」の問題として片付けてしまいがちだが、実はきちんと説明がつくものだとして理解させることであった。具体的な工夫点としては、生徒からより論理的な説明を導き出すため、各グループが解釈する二首には、授業者が一定の型（和歌のテーマや補助教材の鑑賞文）を与えた点、発表のリハーサルを行わせた点などがあつた。

この報告に対する質疑応答では、「生徒の発表態度や技能、また、『正しく』批判し合えるという生徒間のコミュニケーション力をどのようにして伸ばしているのか」という観点に質問が集まった。これに対し授業者からは、国語の授業のみならず、「探究基礎」の授業をはじめとする学校内の様々な取組が生かされているとの説明があつた。

最後に、公開授業者2名より今回の公開授業に関する概要の説明をおこなった。「現代文」の授業と本校学校設定科目である「文科基礎教養」とを連携させているという工夫が述べられた。

第2部 『分科会テーマに基づくグループディスカッション』

冒頭で、本校教員より分科会テーマについての補足説明がなされた。それを受け、4グループに分かれて、各校の取組を交流し、「トライアングル」を実践するに当たって生じる課題、およびその解決策について議論した。各グループからの発表では、『『トライアングル』は社会の中で必要とされる力である』という意見が出る一方で、「それを養成するための『ベース』となる学校の諸活動を充実させることも肝要となる」という意見も出た。また、「生徒主体の授業において、聞き手の生徒の反応だけで評価するのは難しいのでは」という指摘もあつた。これについては、各校から「自己評価と他者評価のどちらをも加点する」といった実践例が紹介された。

今後に向けて

最後に、指導主事より、文科省が定める「言語活動」は評価の対象ではなく、「読む力」「書く力」を身につけるための手段であること、よって気楽にできる小さなことから始めることが必要だという助言をいただいた。今回の研究大会を通して、「言語活動」の充実には、国語科の授業内容だけではなく、学校が育てたい生徒像とも関わらせながら、学校全体で取り組む必要があるということを確認した。しかし、国語科ではそれを先導する立場として常に「トライアングル」の実現を可能にする授業を模索していきたい。

地理歴史科・公民科

分科会テーマ：『事象のつながり，知識のつながり』

第1部 『研究授業に関する研究協議』

本校の研究授業者1名が，本時の活動（ロールプレイングを用いた双方向性の活性化）のねらい，また本校の地歴公民科が目指している生徒像などを報告した。質疑応答では，普段の授業の生徒の様子や指導の具体例，カリキュラムなどについての質問をもとに指導方法の交流を行った。また，その中で地歴公民科における双方向性を目指した授業とは，アクティブラーニングや生徒に発表させる等といった方法だけではなく，普段の授業の中で生徒の気づきを授業に生かしていくことではないかという助言をいただいた。

第2部 『事象のつながり，知識のつながりに関する研究協議』

小教科ごとにグループに分かれ，地歴公民科における「事象のつながり，知識のつながり」を目指した授業方法の意見交流を行った。その中では，生徒の既存の知識と新しく獲得する知識をつなげるためにも，中学校の社会科の内容を確認する必要があるとの意見が出された。また，地歴公民科の小教科間でのつながり，他教科とのつながりを促進するためにも，教員間の連携をより積極的に行う必要があることを再確認した。具体的には「国風文化と枕草子（日本史と古典）」や「漢と史記（世界史と漢文）」「鉱産資源と化学（地理と理科）」など多数の実践例が報告された。また，ICT機器の導入による双方向性を目指した授業の可能性についても話し合われた。

今後に向けて

研究大会を通して，地歴公民科における双方向性を目指した授業とは，普段の授業の中で生徒の意見を教師が吸い上げる作業の積み重ねが重要であるということが共有された。知識を伝える講義型の授業になりがちな地歴公民科では，生徒がより柔軟な発想力を発揮できるような講座の雰囲気作りの上に双方向性の授業が成り立つということに気づけたことは大変大きな成果であった。

今後は，分科会で話し合われたように，小教科間，他教科とのつながりをより意識した授業を実施するためにも，教員間の連携をより強化するためにはどのようにすればいいのか検討していきたい。

数学科

分科会テーマ：『双方向性，探究力養成を意識した授業』

第1部 『研究授業の研究協議』

研究授業者から，今回の研究授業は，グループワークを通して生徒が主体的に活動することをねらいの一つとしていたことを報告した。具体的には，探究活動の経験を教科の授業に生かす場を設定し，教員から生徒への一方的な伝達だけではないという意味での双方向，かつ生徒間の双方向，それらが重なり合っただけで全体の活動量が上がっていく学習空間を作ることを目標としていた。グループワークに対する生徒のアンケートを見ると，授業が楽しい，授業外でも友達と問題を考えるようになった，解っていないということが理解できた（メタ認知），という意見があがっている。一方，グループの流れを止めることを懸念して質問をためらう，教える生徒と教えられる生徒が固定化している，という問題点を指摘する意見もあり，それらを参考にしながら授業改善を模索しているところである。

次に各学年の取組について報告した。1年生は探究基礎の授業と連携し，型を学ばせる，2年生は試行錯

誤すること・疑問を持つことを意識させると共に、基礎も固めさせる、3年生は問題演習中心の授業になりがちであるが、授業の中で扱った問題を提示しながら、数学のもつ楽しさを感じさせる、という内容の報告を行った。

第1部のまとめとして助言者から、学力の抜け落ち、忘却曲線の克服について助言をいただいた。また、従来型のグループワークと、相互に協力し個人が責任を意識しているグループワークの紹介、教え込み型の授業とグループワークの使い分けについての指摘があった。

第2部 『分科会テーマに基づく発表と意見交換』

初めに本校教員の発表を行った（使用したPP画像をHPに掲載）。グループワークを行うときのポイントは、適切なタイミングで適切な問題を用いること、各グループへの助言を適切に行うことである。各グループの議論の状況や深まりを見守り、議論が進むようにそのグループに適した助言や誘導を行うことが教師に求められる。また、リフレクションも重要である。個々の生徒が議論の内容を自分の理解に落としこむことを目的とする場合は、レポート作成が有効な方法の一つである。アンケート結果や取組の様子から、グループワークは生徒のモチベーションを上げるのに効果的であり、その後の個別指導につなげていくのが大切であると考えられる。しかし、学力向上への有効性は今後も検証が必要であり、来年も引き続き研究したい。

質疑応答の時間には、グループワークの頻度、問題のレベル、生徒の予習、授業進度について、学力低位の講座でもグループワークは可能かどうかという質問が出され意見交換を行った。グループワークは問題の選び方によってどの講座でも十分に可能であること、研究授業を行った講座では、多くて週に1回程度のグループワークを行っていることなどを紹介した。

今後に向けて

最後に助言者から高大接続を研究している中でジグソー法が一つの手法であること、鳥取西高校と鳥取農業高校の連携した取組で成果を挙げている例などが紹介された。また、「基本的な技量を定着させてそれを活用する探究型の学習ができるかが重要、それを検証する必要がある」と提言していただいた。能動的な学習活動としてのグループワークの方法とその学習効果について継続して研究していきたい。

理科

分科会テーマ：『理科における双方向性、探究力養成を意識した授業』

第1部 『研究授業の中で双方向性、探究力養成を意識して行う取組』

前半では、本校の化学研究Ⅰの研究授業発表者2名が本時の活動（問題演習におけるグループワーク）を取り入れたねらいや期待できる教育効果、グループワークを実施するにあたっての問題点などを説明した。質疑応答では、グループワークを取り入れる頻度はどの程度か、グループワークを重ねるごとに生徒にどのような変化が見られるか、一つのグループの人数やメンバー構成はどうしているのか、などの質問をもとに意見交換を行った。

後半は内山先生より「双方向性から多方向性を取り入れることの大切さ」「大きなリスクに対応できる力を持った『知的な初心者』を育てる必要性」「学び方を学ばせる必要性」「失敗こそが学びの源・宝庫であると感じさせられるようにする」「他者との交流の大切さ」等の助言をいただいた。

第2部 『新課程における理科小教科間の連携について』

前半では、本校の地学基礎の研究授業発表者から本時の活動（グループワーク）を取り入れたねらいや期待できる教育効果、講義形式の授業とグループワーク形式の授業のバランスの取り方、生徒からのグループワーク形式授業の感想、地学の学習における他教科との連携などの説明をした。質疑応答では、グループワーク形式の授業の良い点と悪い点は何か、グループワークを生徒が楽しいと感じるのはどのような点においてか、などの質問をもとに意見交流を行った。

後半では、本校における新カリキュラムの実施状況の紹介、学年のクラス編成について、全国の新カリキュラムの実施動向などをもとに意見交流を行った。どの学校においても、1年次の基礎科目の履修方法や、履修させる順番、単位数不足などの苦戦している様子がみられた。各学校の実施状況の報告を通じて、理科全体としてかかえる問題を全国の学校で共有することができ、改善策などの有意義な交流ができた。

最後の京都市教育委員会平井主事より「双方向性を意識した授業のスタイルの一つにグループワークがあり、双方向性の取り入れ方は様々あり、深い授業ができるスタイルを見つけて欲しい」という激励の言葉をいただいた。また、カリキュラムについて次年度以降は、検証・確認の時期に突入するため各校においてふさわしい設定を目指してもらいたいと提言していただいた。

今後に向けて

双方向性授業の効果的な取り入れ方や、生徒へ知識だけではなく、学び方を教えるなど様々な課題がある。これらの課題を乗り越えていくために、小教科における連携、グループワーク授業の質の向上など教員の指導力向上をより一層目指していく必要がある。

英語科

分科会テーマ：『生徒の4技能を伸ばす有効な活動を考える』

第1部 『研究授業の研究協議』

前半では、授業者からそれぞれの授業の目的や工夫、課題などに関する発表を行った。グループディスカッションの活動を中心とした授業を展開したコミュニケーション英語Ⅰの授業者からは、グループディスカッションを導入するにあたっての留意事項が述べられた。具体的には、定期的に十分な時間をかけて実施することや、良い題材を選ぶこと、話す際の「型」を最初に提示すること、などである。教科書の内容に関して自分の意見を相手に伝えることを目的とした授業を展開した英語Ⅱの授業からは、生徒の学習意欲は1年次の海外研修の効果もあって非常に高いことや、1年次から授業は英語で行ってきていること、授業を「知識を教える場」ではなく「言語活動の場」として活用していることなどが述べられた。

後半の質疑応答では、当日の研究授業の中での活動に関する質問や、1・2年次の教科書を使った授業から、3年次の難易度の高い教材への移行に関する質問がなされた。また、言語活動の際、内容と正確性のどちらを重視するかといった質問や、「生徒が将来の英語の重要性を認識している」と授業者が言っていたことに対して、さらに詳しい説明を求める声もあった。

第2部 『本校の取組の紹介とグループディスカッション』

前半では、本校教員より4技能を中心とした3年間の取組の流れと、コミュニケーション英語Ⅰ、およびライティングの授業展開の紹介を行った。

後半では「リーディング」「ライティング」「リスニング&スピーキング」の3グループに分かれて、研

究授業に関する協議や各校の取組について交流を行った。

リーディングのグループでは、各校から普段のリーディングの授業の様子を交流した。生徒が初見で概要を理解することに重きを置き、意味の確認は後に、中心となる単語から周辺へ読ませていく指導法などが紹介された。学年で単語調べと全訳を予習する学校もあり、リーディングの目標をどこに設定するか、校内やチーム内の連携、授業で扱った内容の英語が生徒にどれだけ定着しているのかについても議題となった。

ライティングのグループでも各校から普段のライティングの授業の様子を交流した。ライティングの授業もすべて All English で進めており、テキストの和文を英訳するだけではなく、ディスカッションなどを通じ、その文章の内容を深く理解させたり発展させたりする取組や、生徒に黒板に英文を書かせる際に必ず2通りの文を書かせるという取組が紹介された。

リスニング&スピーキングのグループでは、普段の授業でどのようにリスニング&スピーキングの活動を取り入れているかということに加えて、ディベート大会やスピーチコンテストなどの取組も紹介された。

最後に、助言者より、4技能はすべて連関しており、別々に学習することは不可能であること、その中でもリーディングは特殊で生徒がどこまで理解しているかのチェックが欠かせないこと、ライティングは4技能の最終段階であり、負担が大きい分、他の技能をうまく助けに使うことが必要であることなどが提言された。

また、指導主事からは、文部科学省が、今までにはない規模で今回の改革に取り組んでいること、具体的には小学校の英語教育をさらに強化し、学習内容が2年前倒しになること、その結果英語教員の根本的な意識改革が必要であることが示された。

本校の歩み

分科会テーマ：『堀川高校の歩み～自立する18歳をめざして～』

「堀川高校の取組と展望」、「進路」、「探究」、「学年指導体制・統括室」についての説明を順に行った。

【堀川の歩み】

平成7年に、京都市教育委員会が、「京都市立高等学校21世紀構想委員会」を立ち上げる。

第1次答申、第2次答申を受けて、堀川高校がパイロット校となる。

平成11年に探究科1期生が入学。

探究科の目標は、「わが国の科学・文化の担い手を育成する」「自立する18歳を育てる」

平成15年探究をマネジメントする研究開発部の発足

平成24年校内組織の改編。統括室・学務部・学校生活部・企画研究部を設置。

【進路】

教科指導力向上の取組

4つの新組織とその中の企画研究部の活動内容

リフレクションの取組と成果

授業アンケート・公開授業・研究大会について

研究大会の取組と今後の取組について→キーワードは「探究力養成」

【探究】

本校独自の科目「探究基礎」の紹介

期間は1年半

教員の組織的な対応で生徒の「探究能力」を伸ばす授業をデザインする
身につけるもの

- ・ 普遍的な探究能力と態度
- ・ 仕事をする上で必要となる力
- ・ 学力, 意欲, 学習方法
- ・ わからないことに耐える力

【学年主導体制・統括室】

*学年主導体制について

学年団が全般にわたる教育活動を主導

学年主任の役割について

企画研究部・統括室・学年団の3部署の連携

*統括室の役割について

学年団・3部署の評価を行う

統括室長は3学年の主任の主任的な存在

企画会議を毎週実施（学年主導体制の確認・検討・支援を行う）

校内業務の進行管理・危機管理を担う